

# 風とともに季節はめぐる

## フィールドから見えてくる インド洋西海域世界のリズム

鈴木英明 すずき ひであき / 日本学術振興会特別研究員(東洋文庫)、AA 研共同研究員

アフリカ大陸東岸からインド亜大陸西岸に広がるインド洋西海域では、古くからモンスーンを利用した航海活動が行われてきた。

僕は現在、フィールドでの経験を活かしつつ、この海域を中心とした新たな歴史世界像の構築を目指している。



ダウ（三角帆を張った木造帆船）。

### インド洋西海域史研究と フィールドワーク

19世紀インド洋西海域世界を主たる研究対象とする僕がフィールドワークで得たデータを縦横に用いることはとても難しい。21世紀に入った現在、19世紀の出来事を当事者として記憶している人に出会うことも、その当時の町並みや建築物に出会うこともほぼ不可能に近い。インド洋西海域を象徴するダウ（三角帆を張った木造帆船）を見つけるのはたやすいが、現在となつてはその多くがエンジンを積み、航海の仕方も変化している。それでも、僕はフィールドワークに出かける。それはなぜか。フィールドには、文書や先行研究からは得られないヒントがそこかしこに転がっているからだ。

インド洋西海域の気候は「モンスーン(季節風)」によって特徴付けられる。北東モンスーンと南西モンスーンが定期的に交替することで、この海域では海を跨いだ2つの場所を結ぶ安定した往復航海活動が可能なのは、紀元後1世紀後半に著されたとされる『エリュトゥラー海案内記』でもすでに言及されている。このように、インド洋西海域での航海を考えるうえでモンスーンは欠かすことのできない要素なのだが、航海活動、そしてそれによって実現される物質的な交換を契機として繋がり合う人々にとってのモンスー

ンは、航海のリズムを定めるだけのものなのだろうか。これが現在、僕が取り組んでいるテーマであり、そのヒントこそフィールドで見つけたものだ。

### ヒントに出会う

僕がアブド・アッラーとラーシドに出会ったのは、オマーンの港町スールに行ったときのことだ。8月のスールの太陽は僕の肌をジリジリと焼き付けていた。当時、建築用の木材に乏しいとされるこの地域でどのような木材がどこから輸入されてきたのかについて、何か情報が得られないかと海岸通りを歩いてた僕は、一軒の崩れかけた大きな廃屋を目にした。廃屋は内部の様子や壁面のなかなど、なかなか見られない部分を観察できるので好都合だ。梁には太いチーク材が用いられ、梁と梁とのあいだにはマングローヴ材が渡されている。その廃屋はおそらくかつては立派な邸宅だったのだろう。がれきの山に登ったりしてひと段落つくと、ふと隣家の門の前で2人のおじさんたちが座っているのを見かけた。話しかけてみたくなり、僕は近づいていった。彼らがアブド・アッラーとラーシドだ。2人はぎこちない挨拶をする汗と廃屋の埃で汚れた僕を招き入れてくれて、よく冷えたジュースをふるまってくれた。廃屋の主はドバイに現在住んでいること、マングローヴ材は東アフリカから、チーク材は南インドからそれぞれ運ばれてきたことをそこで知った。日陰は心地よく、しばらく話をしていると、夕暮れ時の礼拝を呼び掛ける声がモスクから聞こえてきた。彼らはモスクへ、僕はホテルに戻った。

翌日も夕暮れ時、僕は同じ場所と同じように話をしていた。そんな感じで、毎日、彼らのうちのどちらか、あるいはその両方と夕暮れ時を過ごすのが日課になっていった。話をしていくうちにわかったのは、ふたりともナーホダー（航海中に於ける船舶の最高責任者）の家系だということだった。アブド・アッラーの家は父の代までアデン湾への航海を専門とし、数隻の船舶を所有するナーホダーで、ラーシドの方は祖父の代までイラク、インド、東アフリカに頻繁に航海をしていた。この話を聞いた時点では、僕の意識は彼ら自身ではなく、彼ら

スーク（市場）に並ぶ  
ナツメヤシの実。



スールの町並み（海から）。



の父や祖父に大きく傾いていた。つまり、ナーホダーがいつ、どのような航海を行っていたのか、何を運んでいたのか、そうしたことがこのときの野帳には色々と書き込まれている。

### ヒントを掴み、そして文書に立ち戻る

そんな僕の興味関心のベクトルが急旋回したのは、ラーシドの車に乗っていたある日の夕暮れ時だ。スール市内から4、5キロ離れた場所に古い要塞がある。そこに通り掛かったとき、子供のころ、ここでよく遊んだのだと彼はふと話し出した。町から歩いてきたのかと尋ねると、要塞から程近いバラド・アル＝スールにも家があったのだと言う。彼によれば、6月から8月の一番暑くなる時期には、スールを離れて、ナツメヤシ林に囲まれ、水も豊富にあるその村落で一家そろって過ごしていたのだという。「スーリーのはじめに爺さんが帰って来るだろ、それでコースが終わってまた出かけちゃうまでここでみんなで過ごすんだよ」、「船が帰って来てから、また出ていくまでのあいだは港には船がたくさん停まっているんだけど、人は留守番を除いてみんなバラド・アル＝スールで過ごすんだ」。スーリーとは5月から7月まで吹く南西風のことであり、コースとは8月から9月までのやはり南西風だ。コースの時期が終わると、アズヤブという北東風が吹き始める。つまり、



バラド・アル＝スールのナツメヤシ林。



スーリーは彼にとっては祖父を運んでくる風で、コースが止むことは、祖父とのしばしの別れを告げる合図だった。再開と別れのそのあいだ、祖父も含めて彼の家族はバラド・アル＝スールで過ごし、ナツメヤシを収穫したりしながら過ごす。別の機会にアブド・アッラーにこの話をすると、彼のところも同じだったという。このときに僕はナーホダーの家族もまた、モンスーンによって定められる航海のリズムのなかを生きていることに強く気付かされた。

僕は帰国後、欧米やインド、ペルシア湾岸諸国などで集めた文書を改めて読み直してみた。すると、いままでも気にも留めなかった記述に呼び留められるようになっていった。たとえば、ナツメヤシの収穫だけではなく、ペルシア湾の基幹産業であった真珠採取もスーリーからコースの時期に最盛期を迎えること、オマーン湾やペルシア湾の港町の多くの後背

地に緑豊かな避暑地があり、そこと港町とのあいだの移動、避暑地でのナツメヤシなどの収穫作業と航海活動とが定期的に連動していること。こうした事実まで視野にいと、船乗りたちの活動だけではなく、その家族や、船乗りたちが運ぶ産物の生産者たちの活動もまた、モンスーンのリズムに律されていることがわかる。こうしたモンスーンのリズムにあわせて行われるさまざまな人間活動、しかもそれがお互いにギアがかみ合うように連動しあっている総体をインド洋西海域世界として捉えられないか、これが現在の僕の課題だ。

### 風とともに季節はめぐる

ここにちの石油で潤う湾岸諸国では、航海活動もナツメヤシや真珠の採取も基幹産業ではない。バラド・アル＝スールにはいまでもナツメヤシ林が広がるが、そこではインド系の労働者たちが働いていて、スプリ

ンクラーが定期的な水やりをしている。オマーンに限らず、どこでも建物に入ると凍えるくらい冷房が効いている。もはやスーリーからコースのあいだに避暑をする必要もなくなった。事実、ラーシドやアブド・アッラーによれば、1980年代には、家にクーラーがつけられるようになり、バラド・アル＝スールで避暑をするようなことはなくなっていったという。

しかし彼らは6月から9月くらいまでの一番暑い時期——スーリーからコースのあいだ——に、暑いスールを離れて雨期を迎えるムンバイやバンコクによく行くと言う。彼らの行動のリズム自体は、子供のころと変わっていないと言えるのかもしれない。つい先日ムンバイにいたアブド・アッラーから電話をもらった。次に彼らに会うのはいつ、どこになるのだろうか。風とともにめぐる彼らの生活のリズムに僕がうまく乗れたときが再開の日になるのだろうか。